コミュニケーションを求めておのの く若者たち
H4.1.6/日本教育新聞社、週刊教育資料281号

社会と学校のはざまで〈9〉

コミュニケーションを求めておののく若者たち

昭和音楽大学助教授　西村　美東士

一　自分は求めるけれど、人にはあげられない

人間は、言葉がけ、スキンシップ、まなざしやうなずき、などによって相手の存在を認めていることを示す。このような行為を「交流分析」では「ストローク」とよぶ。人間は誰でもストロークを求めて生きている。

しかし、ストロークを出すことによって傷つくこともある。自分がせっかくストロークを出しても、相手のほうが心を開いてくれなかったり、相手から迷惑そうな態度を示されたりするとそうなる。相手はストロークをもらって基本的にはうれしいはずなのだが、そのうれしさよりも防御の気持ちのほうがもっと強いときや、こちらのストロークの「裏の意味」に気づいたときは、相手は、せっかくのストロークに応えることができずに無視または拒否の態度をとるのである。ストロークを出す本人にとっては、その発信はリスク（危険）のかたまりなのだ。

今日の若者たちは、自分からストロークを出すことに慣れていない。そのうえセンシティブだから、相手からのストロークの裏にある不純さや、その「罠」に反応することの危険を嗅ぎとることにはとても敏感である。だから、相手からのストロークに答えることもできない。

そのため、大人が懸命になって「心と心のふれ合いを大切にせよ」「人間はわかりあえるものだ」などと若者たちに上から号令をかけても何の効果も及ぼさない。学生の「出席ペーパー」（拙著「生涯学習か・く・ろ・ん」学文社、参照）から、ひとつ紹介する。

「ゼミを自己変革の場に、と先生は望んでいるようですが、私にはゼミの場が自己変革の場にはなりません。自分が何を言っても、何を思っても、大丈夫、守られている、というふうには感じられないので、つまり受容されるようには感じられないので、自己開示はできません。だから、ゼミは自己変革の場にはなりえません」

この学生の場合は、人間関係のことをよくわかっているのだ。そして、自分が受容される特別な場を他の所で見いだしてさえいるのである。だからこそ、簡単には心を開かない。私は、その真摯な生き方を立派だと思う。

二　現実原則の中でのストロークの自己管理を

しかし問題は、受容されるとはかぎらない日常生活の「現実原則」の中で、ストローク発信の自己管理（場合によっては発信しないことを含めて）をどう行うか、ということであろう。

いっぽうストロークには、それが豊かな人はますます豊かになり、貧しい人はますます貧しくなるという厳しい法則がある。ストロークを得るためには、ストロークを出さなければならない。ストロークが出せるようになるためには、ひとつには「ストロークを出してよかった」という体験を何度も味わうことが何より大切である。

そしてもうひとつには、ストロークを出して傷ついた場合、そこから逃げずに、どのような形でその体験を自己に内面化するかということが問題になる。自分が傷ついた事実をあるがままに認識し受けとめることができれば、時と場合と相手に応じて出したり出さなかったりすることができるようになるだろう。ストロークを出せないということと、ストロークを出せるけれども出さないということとは、外見は同じように見えても内面的には正反対のことなのである。

一番すじが通らない生き方は、自分はカプセル

の中に閉じこもってしまっているのに、それでいてストロークがもらえないと嘆き、カプセルの中でいつまでも他人からのストロークを待っている姿である。それは、閉じこもっている自分の姿が見えてないだけのことなのだが、そういう若者もたくさんいる。

わたしは、そういう学生に、こう言っている。

「今は閉じこもらないではいられない自分の姿をこそよく見つめて、将来まで、そういう人間の悲しみの深さをよく覚えておいてほしい。そうしたら、少なくとも今年の新入社員は心を開いてこない、と不満を言うものわかりの悪い上司や、今の子どもたちは消極的で困る、と子どものせいにする権威主義的な教師にはならないですむはずである。なぜなら、いま悩んでいるあなたは、消極的にならざるをえない部下や子どもの心を共感的に理解する心をもっているはずだからである。あなた自身は心を開かないでおいて、相手には開くように求めるとしたら、それは最悪である」

社会教育のゼミで学園祭に参加、近所の子どもたちにストローク発信

三　コミュニケーションの成熟化と無力化

今日、コミュニケーションの手段は大いに発達している。しかし、そんなことは若者たちにとって「あたりまえ」のことであり、ツール（道具）の素晴らしさよりも、コミュニケーションするということ自体が大切なのだ。これをコミュニケーションの成熟化とよぶことができる。

しかし成熟化とは、ある面では、活力を失うことでもある。一方通行の音楽・映像メディアやフェース・ツー・フェースではないメディアによって、自分は傷つかないままにコミュニケーションを享受しているうちに、おたがいの存在を認め合うストロークのやりとりのチャンスまでも失いつつある。傷つく恐れのないコミュニケーションは、ストロークではない。そういう音楽や映像のメッセージが、カプセルの中の自分に個別に与えられたような錯覚のもとに受け入れられて、親和欲求を少し満たしている。つまり、エセ・ストロークとしても機能している。

また、若者たちは、おしゃべり（双方向）も華やかに上手に交わすことができる。雑誌「教育」（国土社）が「おしゃべり症候群」を特集してその空疎を衝いたのは一九八五年だが、いまや「双方向の一方通行」ともいうべき恐るべき軽やかなコミュニケーションが成熟しつつある。

言葉は交わされているが、気持ちは交流できない（しようとしていない）のである。「それがおしゃれだし楽しいのだから」と若者は言うのであろう。

四　管理や保護ではなく自由の恐怖を

コミュニケーション教育の要点は、いまや、指導者が若者を管理することでも保護することでもないのではないか。管理や保護があると、それが現実原則の対象にされてしまい、若者自身のストロークの非力もそのせいにされてしまう。

ストロークを自由にやりとりさせる機会を提供することが必要である。管理したり保護したりしてはいけない。

また、自由といっても、与えられた目標に追いつこうとさせるためのものでもない。どんなストロークも自分の判断で自由に出せるという状況、誰のせいにもできない状況に彼らを引きずりこんでこそ、若者は相手からのストロークを求めているのに、自分からそれを出すことについては恐れおののいている自分自身に気づくだろう。そこで自分はどうするのかが本来の現実原則の学習につながるのである。